

大東アーカイブス第二回企画展

「雑誌『大東文化』とその時代」

展示期間：平成18年9月16日（土）～平成19年3月24日（土）

（開室時間 毎週月～金曜日 9:30～16:30）

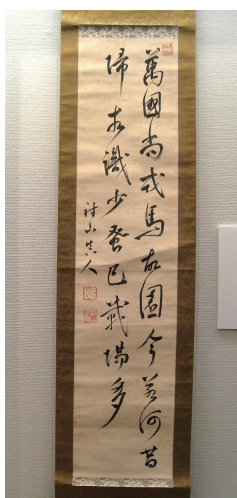
展示場所：板橋校舎2号館1階 大東文化歴史資料館展示室

今回の企画展では、大東文化協会によって1924（大正13）年3月に創刊された雑誌『大東文化』をテーマに掲げ、『大東文化』の現物を展示しているほか、同誌を飾った錚々たる執筆陣のうちの一部（小川平吉、高浜虚子等）を紹介しています。

雑誌『大東文化』の誌面には、大東文化協会及び本学の前身校である大東文化学院の基本理念であり今日の大東文化学園にも脈々と受け継がれている、“東西文化の融合”“東洋学術の研究”の精神の一端が色濃く反映されています。



展示品から 小川平吉の書幅



写真は、1923年（大正12）に大東文化協会の創設に関わり、大東文化協会第四代会頭を歴任した小川平吉の書幅。本学日本文学科助教授で当館運営委員浜口俊裕架蔵の絹本・一幅である。盛唐の詩人杜甫の五言絶句「復愁十二首」中の第三首を揮毫する。引首印「天空快闊」、落款印に陽刻で「小川平吉」、陰刻で「射山長壽」を押す。「射山」の号は、小川の生地、長野県諏訪郡御射山神戸村に因む。参考までに釈文は、「萬國尚戎馬。故園今若何。昔／歸 相識少。蚤已 戰場 多。／射山真人」である。また大意は、国内はなおも戦乱状態であり、我が故郷は、今、どんなであろうか。以前に帰郷した時でさえ、顔見知りともう稀であって、その時からもう戦場になっているところが多かったのだが、というもの。なお、この書軸の展示は2007年3月までの予定である。

（日本文学科助教授・歴史資料館運営委員会委員 浜口俊裕）

資料解説 小川平吉と創設期の大東文化大学

今回の第二回企画展で取りあげた小川平吉という人物は、「外にアジア主義」「内に思想問題」を自らの政治課題として、明治・大正・昭和の日本の歴史に重要な足跡を残した人物である。小川の史料が東京大学名誉教授の伊藤隆氏の手によって発掘されたのは1964年のことであるから、今から40年以上も前のこと。しかし、小川が大東文化協会の創設に深く関与していることは、この40年もの間、殆ど注目されてこなかった。勿論、大東文化大学は、小川一人の力で出来た大学ではない。しかし、小川平吉関係文書（国会図書館憲政資料室所蔵）にわずかながら残されている大東文化関係資料をみると、創設当初小川が如何に協会及び学院の運営に尽力し、学生達からも頼られていたかが伺える。今回紹介した学生からの書簡もその一つに他ならない。

恐らく、大東文化協会及び学院の創設は、当時の政界に隠然たる力を持っていた小川の政治活動の文脈で再考することも出来るのではない。その考察は、実は、当時の日本政治史・思想史の一側面を解明することに繋がると言えよう。（政治学科専任講師・歴史資料館運営委員会委員 武田知己）

（封筒裏）
麹町区内幸町一五
小川平吉閣下
侍史
大東文化学院学生一同
（封筒裏）
大東文化学院学生一同
（本文）（句読点は適宜補った）
時下初夏之候
閣下益々御清穆之段奉賀候。陳者昨年十二月新総長御就任以来、学院将来「」存続発展之為、新任教授之大同団結を冀ひ、當局を信賴致候処、今回計らずも該問題破綻之原因たるべき、川田学生総監ノ策動ニヨル上野、相良両氏（井上総長時代退学処分受ケン学生）講師、学生監、主任心得、教務主任心得任命ノ件突発致候為、学生は是の当初の目的貫徹ノ為、一切の障害たるべき者を排除し、更に学院の根本的改善を致されん事を深く期待致居候間、何卒生等の苦衷を御了察被下、御善処被下度、奉懇願候
草々頓首
「昭和三年」六月二十二日
大東文化学院学生会
小川平吉閣下
侍史
※小川平吉文書研究会編『小川平吉文書』みずす書房、一九七三年、五三三頁を参考とした。（国立国会図書館憲政資料室所蔵「小川平吉関係文書」）